ペタール・グベリナ先生　明日に導く人

Professor Petar Guberina
– A Man for Tomorrow –

クロード・ロベルジュ
Claude ROBERGE

Summary

This is a kind of autobiography conveyed by a Jesuit who came to Japan as a missionary. He was asked to teach French language at Sophia University, Tokyo.

Two main people influenced him on his teaching.

The first one was his own mother, Mrs. Mariette Lacombe Roberge who stood at the beginning of his mother tongue and continues to influence him today.

The second influence on his teaching came from a Croatian, Professor Petar Guberina, he met by sheer chance in the island of Ponza, Italy, and in Zagreb, Croatia.

The influence of these two persons remain in his mind and heart forever.
The publication of this research was made possible due to the kind help and understanding of Dr. and Mrs. Yasu.

The author cannot either thank sincerely the editors of the Bulletin of The Faculty of Foreign Studies who granted him the permission to publish his research in the first issue of their review of 1967.

1. サバティカル研修の成果と母親の教え

イエズス会の任務命令により上智大学外国語学部でフランス語教育に携わることになった。外国語を学ぶ上で発音は重要であると考えていたが、

日本人学生に正しいフランス語の発音を身につけさせる効果的な方法を見出す事ができず悩んでいた時期に、幸いにも 2 年間のサバティカル教育が認められ、1965 年、パリに行くことになった。パリの外国人のための専門学校でフランス語教員のための講座やソルボンヌ大学での講座、ベルナルデン通りの音声研究所の講座にも参加したが、筆者の求めるものではなかった。たまたま、パリで購入したルモンド誌に、「ブザンソンでフランス語講習会」の開催広告記事が掲載されていた。大学や専門学校等での講座に満足できなかったこともあり、ブザンソンの講習会に申込みを行い、参加が認められた。その講座には、フランス語専攻の大学院生や大学教授が世界各国から 200 人程度参加していた。フランス語の音声学についてはフランス人による指導と思っていたところ、実は、ユーゴスラビアの教授がフランス語の発音矯正指導の講座を担当されていた。筆者はその講座に参加し、フランス語の緊張度、リズム、イントネーション、隣接音、それらの要素を身体運動に連携させ理論的に整然と一つにまとめたあげたユーゴスラビアの方式に衝撃を受けるとともに、日本人学生に正しいフランス語の発音指導に適用すれば効果が上がるのではと直感した。また、ユーゴスラビアの教授の一人が「9 月にイタリアのカプリ島近くのポンザ島に本方式の提唱者であるグベリナ教授が来られる」と筆者に話しかけてくれた。しかしながら、当時、当該ユーゴスラビアの方式はヨーロッパでも認知されている指導法でないこともありポンザ島行きに悩んだが、折角の機会でもありポンザ島に行くことにした。

講座はイタリア人向けの講座で、イタリア人のフランス語教授、グベリナ教授が担当されていた。グベリナ教授から直接筆者にザグレブに来るようにとの誘いがあった。当時のユーゴスラビアは共産国でキリスト教に理解がないのではと一抹の不安があったが、グベリナ教授のメソッドに惹かれる面が強いことと　①ザグレブで聴覚障害や言語障害の学生（日本人の新入学生と同じ）がどういう教育を受けているか？　そのための最適な音声の教育設備・機械があること。　②上智大学でのフランス語教育の方針を決める。　などがあり迷いに迷っていたが、12 月初めに、パリのユーゴスラビア大使館からビザが発給され、3 週間滞在することになった [1]。

1　クロード・ロベルジュ , ヴェルボートナル・システムに基づく発音矯正 , 上智大学外国語学部紀要第 1 号 , 1967, pp.123-136.

ザグレブには２人（男女）の日本人が留学しておられ、男性はベオグラードでセルビア・クロアチア語を、女性は声楽を勉強されていた。その二人が日本語の最適性（最適性とは、母音や子音についてどのようにして聞き分けているのか、聞き比べしてみると最適な母音と子音の音声周波数があること）のヒントを与えてくれた。ザグレブではグベリナ先生のメソッドを用いて聴覚・言語障害者の言語教育をしていた。当時、聴覚・言語障害児の教育のための講座もあったが筆者は上智大学のフランス語教育法を最優先し受講しなかった。

研修で習得したグベリナ教授の教えであるフランス語を母国語としている人の言語矯正メソッドは、日本人の初学生には直接参考にならない。1967 年 4 月からフランス語の教育が始まるため、フランス語学科の学生にフランス語らしくフランス語を話してもらいたいとの想いで、具体的に学生対象にフランス語をどのように教えたらいいのか悩んでいた。

フランス語教育の準備をしている 1967 年 3 月のある時に、自分の家で、目や手を動かしてフランス語がどこにあるか探していた。そして、筆者が子供の頃、母親が子供達を寝かせつける前に云われた「ピピ、ロロ、ドド」（おしっこ、水を飲む、寝なさい）のリズムを思い出し、腕を伸ばすことによりフランス語のリズム感が身体の動きで表わされると感じた。

研修時にパリで購入した下図に示すフランス語のわらべうたの本[2]を無意識に開いたところ、全く偶然に「Bibi Loro」のわらべうたがあり、「ピピ・ロロ」のニュアンスに似ており、その歌詞を独唱した時、自然に腕を胸の前で廻して、最後に腕を横に広げ手先を伸ばす動きを入れて発声するとフランス語のリズム感が腕の動きで表し得ることを体験した。

2　Beaucomont, Jean, Guibat, Frank, Tante Lucile, Pinon, Roger, Soupault, Philippe, Les comptines de langue française, Paris :Seghers, 1970, p.145.

実際に初講義の時に、説明なしで筆者の「Bibi Loro」独唱と腕の動きに合わせ、学生に復唱させ、リズムや緊張などを腕の動きや手の動きを一人ひとりチェックして、発声に合わせて練習させてみるとそのリズムがフランス語らしく聞こえてきた。学生達は戸惑いながらも筆者の動きを正確に真似ることにより、自らの発音がフランス語らしくなってきたことに喜びを感じ取ったことから、この指導法が初学生にとって効果があることを確証した。結局、筆者が幼少の時に受けた母親からの教え（母親メソッド）を無意識にフランス語学科の初学生に教えることになった。

一方、筆者は 1956 年、初めて日本語を習ったが、フランス語のリズムとは異なり日本語のリズムには自信を持てなかった経験がある。日本語はフランス語と比較すると緊張はほとんどなく、日本人は挨拶をする時に頭を下げるが欧米人は頭を下げることはない。電話で話すときも頭を下げる動きは日本人の特徴的な動きである。

このようにフランス語と日本語ではリズム感が異なるため、フランス語圏の子供がメロディーなしで身体を動かして唄えるわらべうた（ナーサリーライム、フランス語ではコンティーヌ　comptine）をフランス語学科新入生の初講義に適用し、フランス語のリズム感を育成することにした。

年々異なったナーサリーライム（わらべうた）や、シャンソン（童謡）を取り上げ、1 クラスを 4 つのグループに分け学生指揮の下、強弱を付けて発声させ、輪唱をさせてみると学生の声は徐々に大きくなり、身体を動かすことによりフランス語らしく聞こえるようになってきたことから、グベリナ教授が提唱する「ことばの音は身体の動きから生じる」の指導方法をフランス語学科新入生に最初の段階で適用したことは自然の流れとも云える。

2.1.　ナーサリーライム（わらべうた）によるフランス語学科学生のリズム感の教育

「Bibi Loro」のわらべうたは、交互に現れる弱拍・強拍の繰り返しがリズミカルで覚えやすいものである。

(1)

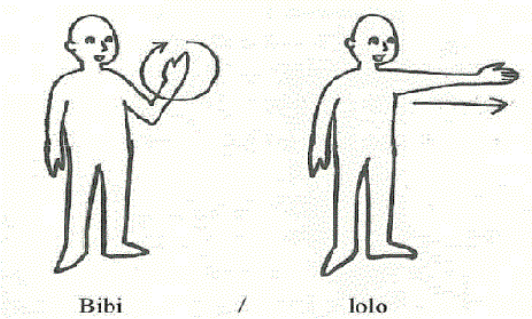
1- Bibi / Lolo

2- De Saint- / Melo

3- Qui tue / sa femme
4- A coups de / couteau

1- Qui la / console
2- A coups de / casserole,
3- Qui la / guérit
4- A coups de / fusil.

このわらべうたは、1行に強拍が二つあり、4行からなる起承転結が2セットとなっている。学生が名付けた「Méthode Bibi Lolo」の身体の動きを下図に示す。この「Méthode Bibi Lolo」は、放送大学のフランス語講座にも適用され、放送大学の学生のみでなく一般のフランス語学習者にも役立つように放送教育開発センター発行による補助教材[3]が作成された。



「Méthode Bibi Lolo」の身体の動き

次のわらべうたはフランス語圏で広く知られている代表的なわらべうた[2]である。このわらべうたを例にとりフランス語のリズムなどの特徴について説明する。

(2)

Une poule / sur un mur

3　福井芳男監修 , クロード・ロベルジュ , 田辺保子編著 , フランス語の発音— Bibi Lolo —, 放送教育開発センター ,1991.

Qui picotait / du pain dur,
Picoti, / picota
Lève la patte, / puis s'en va.

フランス語のアクセントは、日本語や英語とは異なり単語ごとに決まっているのではなく、語やリズムグループの最終音節の強さと長さにより特徴づけられる。本節ではアクセントのある音節を強拍、ない音節を弱拍と呼び、強拍の母音を下線で示す。上記わらべうたには各行に 4 つの強拍があり、2 つ目の強拍の後に短い休止を（ / ）で示した。行末に長い休止が入る。Une, du のような普通のフランス語ではアクセントがないはずの箇所もリズムを整えるため、ここでは強拍となっている。また 4 つの行の語尾は同じ韻になるようになっており、自然に子供が身体の動きでリズムを感じ、しかも各行が「起・承・転・結」の構造となっているため、まとまりのあるナーサリーライム（わらべうた）である [4]。

次の (3) はフランスの数え歌で、子供が数字を覚えるときによく歌われ、音が繰り返し出てきて規則的な 3 拍子のリズムで調子のよいわらべうたである。

(3)
1- Une et une, la lune
2- Deux et deux, les yeux
3- Trois et trois, les rois
4- Quatre et quarter, la patte.

(4) のわらべうたは全く意味がないが、日本の「ずい･ずい･ずっころばし」のようなゲームの時に唄われるわらべうた [5] である。1 行の全音節が強拍となる行では、強拍・弱拍が交互に現れて生まれるリズムがなさそうであるが、コンマで表わされる休止が弱拍と同じ役割を果たすことになる。

4　クロード・ロベルジュ , 寺尾いづみ , 身体の動きでことばを学ぶ—50 年間フランス語 を日本で教えて , SOPHIA LINGUISTICA 63, 2015.
5　Hélène Gauvenet, Bonjour Line, cours crédif, DIDIER, 1965

(4)

1- Am, stram, gram
2- Pic et pic et colégram
3- Bour et bour et ratatam
4- Am, stram, gram.

ナーサリーライム（わらべうた）は、日本語に翻訳せずに、わらべうたのリズムを優先し身体の動作を忘れないようにしながら繰り返すことが肝要である。わらべうたがもつ脚韻とリズムにより記憶しやすく学習者は教室を離れても自ら練習できるため教育効果があると云える。

2.2.　メロディーのあるわらべうた（シャンソン）

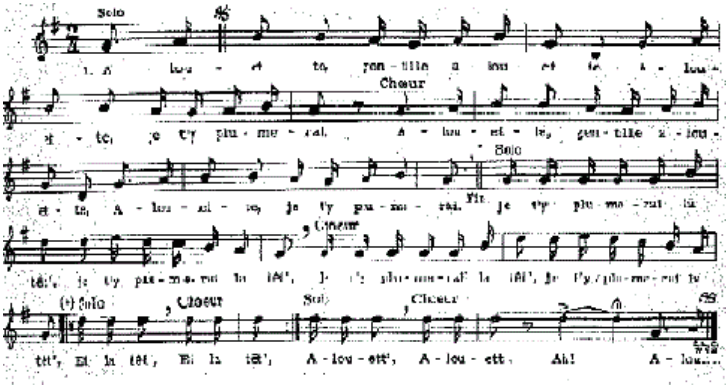
シャンソンの場合のアクセント、発音は普通の会話とは異なるが、手遊びや決まった動作を伴って唄われるわらべうた（シャンソン）は、身体の動きを通してフランス語のリズムを自然な形で習得できるものが多い。また、古くから唄い継がれ親しまれてきたシャンソン[6] (5) ～ (7) には、話し言葉で自然にアクセントが置かれるリズムグループ末の音節が長い音符に相当し、脚韻や歌詞の繰り返しがありフランス語らしいリズムを感じ取る効果があり、子供だけでなく、初めて外国語を学ぶ学生にもフランス語のリズム感を覚えさせることができる。

6　Odile Trémouroux-Kolp, Le chemin des comptines, Dossier Ecole 2000, LABOR

(5)

1- Alouette, gentille alouette
2- Alouette, je te plumerai.
3- Je te plumerai le bec,
4- Je te plumerai le bec,
5- Et le bec, et le bec,
6- Alouette, alouette, Ah!

3- Je te plumerai la tête (bis)
5- Et le bec (bis)
6- Alouette (bis) Ah!
etc



上記のシャンソンは各行の番号順に唄うようにする。

(6)

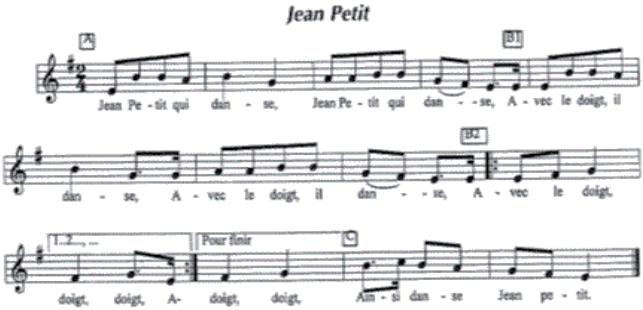
Frère Jacques	Frère Jacques
Dormez-vous ?	Dormez-vous ?
Sonnez les matines	Sonnez les matines
Ding din don	Ding din don.

広く知られている (6) の Frère Jacques は学習者を 4 つのグループに分け輪唱して楽しむことができる。

(7) のシャンソンは、1 クラスを 4 グループに分け、番号付けされたグループに順番ごと発音させることにより、グループ間のフランス語の発音について競争意識を高めることができ教育効果がある。

(7)

1- Jean Petit qui danse, (bis)
2- De son doigt il danse, (bis)
3- De son doigt, doigt, doigt,
4- Ainsi danse Jean Petit.



ナーサリーライム（わらべうた）で体得したリズムを、普通のフランス語を話す時も使えるようにするための橋渡しとして、日常の会話で用いられるような平易な文を徐々に長くしながら身体の動きとともに発話する方法がある。その例として、フランスの絵本[7]を見ながら、日常よく使われる言葉を適切な動作とともに繰り返すことによって、リズムとイントネーションの学習を行うことができる。また、筆者・小川・河野が子供に英語を教えるために作成した「ロベ先生とはじめての英語」の絵本[8]には、各章のタイトル以外いっさい文字を使っていないため、フランス語の第一段

7　Les comptines des Petits cousins (Francais/Anglais), Didier, 1997
8　クロード・ロベルジュ , 小川裕花 , 河野万里子 , ロベ先生とはじめての英語（Mommy's English Method）, 小峰書店 , 2010.

階の学習教材としても使える。

筆者は、この教材を使って小学校低学年以下の児童４名にフランス語を教えた経験がある。児童らはそれまでフランス語の学習経験はなく、週１回、１時間半ほどのレッスンの他は、絵本は家に持ち帰らず、家庭や学校でフランス語に触れる機会は皆無であった。レッスンでは日本語での説明は一切せず、ただ絵本を見せて、絵を指さしながら言葉を聴かせ、同じ言葉を繰り返えさせるだけであった。幼児教育の基本である誤りを指摘することや叱責することは一切しなかった。１年ほどで彼らは導入２章、本編17章の全てのページを諳んじることができた。引続きレッスンを続けたいとの意向があり、同じ絵本を使って、言葉の入れ替えやクイズに答えさせるレッスンをさらに１年半楽しんで続けた。

小学校低学年までの年齢であれば、声を出しながら自然に身体が動くため、ナーサリーライム（わらべうた）のリズムを体感させる身体の動作をわざわざさせる必要がなく、きわめて自然なフランス語のリズムとイントネーション、正確な発音が身につくことがわかった。

子どもに対する指導では、特に留意すべき点がある。第一に、絵を見せ前回までに覚えた語句から始めるなどして、既知の情報からくる安心感を常に与えること。第二に、繰り返しを厭わないこと。リズムが快ければ、子供は繰り返しを苦にせず、むしろ楽しい遊びのようにと捉える。さらに、自由な動きを禁ずる、強圧的・一方的な指導をしないことが肝要である。笑ったり楽しんだりしながら自発的に動けば、どのような動きであっても子供はあらゆる言語の自然なリズムとイントネーションを身につける能力を備えている。

また、筆者は、ザグレブの国立劇場で、グベリナ教授の教えに基づいて訓練を行った聴覚障害児の教育成果発表会を見学する機会があり、児童達がリズム感を持って足踏みや身体の動きで表現する様子を見て、驚きとともに外国語の最初の教育のために、演劇や歌を採り入れることは外国語のリズム感を身につけるために必要であると確信した。

3. グベリナ教授の教え

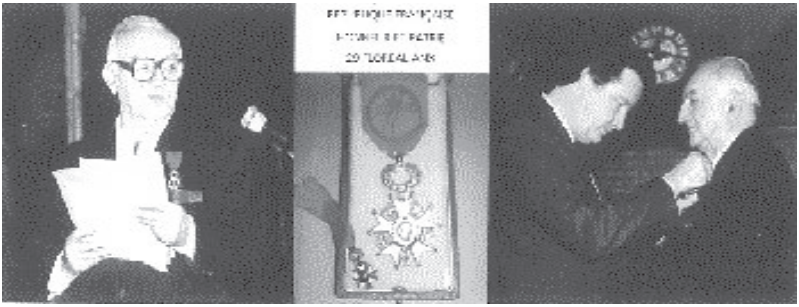
筆者がフランス語学科に導入した身体を使った動きによりフランス語の

リズム・緊張感を学習する教育方法は、“Sound comes from movement”を提唱したグベリナ教授の教えである。以下に、グベリナ教授の偉業について述べる。

グベリナ教授のフランス語教育に係わる業績が称えられ、1968 年、フランス語教育の教材を作った功績について、ドゴール大統領から直接手渡された名誉あるシュバリエ勲章（Chevalier de la Légion d’Honneur）を下図に示す。

Chevalier de la Légion d’ Honneur,
(Francuska),
1968.

また、20 年後には下図に示すように 1989 年 11 月 29 日にミッテラン大統領代理のティエリー・ドゥ・ボーセ 国際文化関係担当大臣からレジオン・ド・ヌール＝オフィシエ勲章（La Croix d’Officier de la Légion d’Honneur）を受章された。

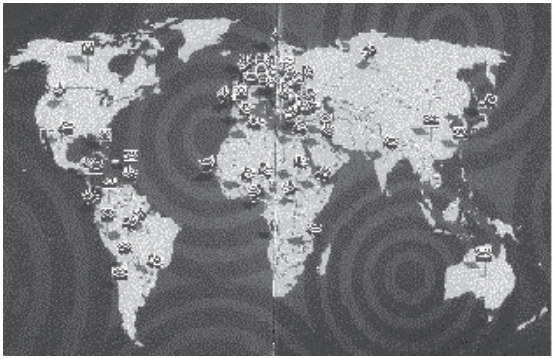


授賞式の 11 月 29 日はユーゴスラビア連邦国の建国記念日であり、フラ

ンス政府の「おもてなし」によるものと思われる。授賞式には、ジャンドロー＝マサルー 大学区長、ボジタール・ガロ ユーゴスラビア社会主義連邦共和国大使、ミシェル・アンドレ 女性の権利担当大臣、ミシェル・ジルベール 障害者担当大臣らが列席された。アンドレ女史はザグレブの SUVAG（S:System U:Universal V:Verbotnal A:d'audition G:gubernia）センターでの研修実績があり、その教育実績を高く評価していた。

筆者は、グベリナ教授やザグレブの SUVAG センターの音声学者たちが開催した講習会に参加する機会を得て、そこでの研究討論の内容が瞠目に値するものであった。そのときに筆者は、ヴェルボートナル・システムが言語教育・音楽教育・発音矯正・聴覚検査及び言語障害者たちの最初の訓練に無限の可能性があることに気付いた。その後直接ザグレブへ赴き、いくつかの研究を行う幸運に恵まれた。グベリナ教授の好意によりヴェルボートナル・システムの精神を説明してもらい、筆者が言語学の応用に進むことになったのはグベリナ教授のお蔭であり、その研究の発展に努めてきた。研修終了後に、日本の言語学者にヴェルボートナル・システムを紹介し、さらにそれを応用されることを切望し、ヴェルボートナル・システムに関してもっとも注目すべき論文を選び、「ザグレブ言語教育―理論と実践―」と題した図書[9]を学書房出版社より発行した。

2004 年時点で、グベリナ教授の教育方法を実践しているセンターは下図に示すように全世界に拡大した。



さらに、筆者編集により、グベリナ教授の教えやヴェルボートナル・システムについての論文をまとめた図書のクロアチア語版、英語版[10]、日

9　クロード・ロベルジュ編著 , ザグレブ言語教育 , 学書房出版 ,1973.

10 Guberina, P, Rétrospection, Rédacteur chef et éditeur Claude Roberge, ARTRESOR NAKLADA ,ZAGREB,2003

本語版[11]を発行した。

4. まとめ

筆者は、筆者の母 Mariette Lacombe Roberge からいろいろな場面を見せられて、単語そのものよりも、ことばのリズム・イントネーション・休止を母親の顔の表情や身振りから感じさせられフランス語を養った。筆者が子供の頃、就寝前に、母から云われた「ピピ、ロロ、ドド」のリズムが、全く偶然に、フランスのわらべうたの本を開いたページの「Bibi Lolo」のリズムと似通っていることが分かり、無意識に母親メソッドに沿って、「Bibi Lolo」を身体の動きを使って生徒に初めてフランス語を教えることになった。このことは、日本語、ポルトガル語など他言語でも同じことであり、幼児の言語学習は、母親が幼児をあやす時、子守歌を唄う時の身体の動き、リズム、ことばの上下、イントネーション、静かさ、から自然に身についてくる。即ち、このことは言語教育の根本が母親からのリズム・動きから伝わっていることを示すものである。

筆者は、来日して 3 年目に、上智大学法学部の生徒に、基礎英語とフランス語の科目を教えていた。ある日、両方の科目を履修している学生が次のような質問をしてきた「先生がもし屋根から落ちた時に、何語で叫ぶでしょうか？」。当時、何と答えたか覚えていないが、その時に、しっかりと外国語を教えないといけないと改めて自覚するとともに、フランス語の教育方法などを確立する必要があると感じた。それ以来 50 年の間、生徒には理論よりもグベリナ教授のことばである「Sound comes from movement」[10]をフランス語の教育に適用し、フランス語のリズム・イントネーションをもっている「Bibi lolo」などのわらべうたを使って身振りによりフランス語学科新入生のフランス語の教育をしてきた。当該教育方法は他の外国語の教育にも適用できると考えている。

筆者は、本論文の作成に協力いただいた友人の　静岡理工科大学　総合技術研究所　安　昭八　客員教授と奥様　芳子氏に感謝する。

---

11 ペタール・グベリナ著 , クロード・ロベルジュ編 , ことばと人間　　聴覚リハビリと外国語教育のための言語理論 , 上智大学出版 , 2012.